

2019. 8. 25. 聖霊降臨節第12主日礼拝式説教

ルカ福音書講解説教

聖書：ルカによる福音書4章31-44節

『主イエスの働き』

先週今週と2回にわたって同じ聖書箇所を読みました。先週は前半の31節から37節。今週は後半の38節から44節に聞きます。それなら初めから分けて読んでもよさそうなのですが、分けることはせず、2週にわたって全体を読むのには、理由があります。それは、31節から44節に書かれていることは深くつながりあっているからです。便宜上2回に分けて読みますが、ひとつつながりの出来事なのです。それで、このような読み方をしました。

さて、31節からの話は、カファルナウムという町での出来事です。安息日に主が会堂において説教をされた。そして悪霊に取りつかれた男から悪霊を追い出す、ということを書いたことが最初に書かれていました。そして今日読む37節以下のところ、その会堂を出た主イエスがシモンの家に行かれた、ということから話は始まっています。ということは、今の教会で言えば、日曜日の礼拝が終わった後のことが描かれている、と言えます。シモンとは、後に弟子になったペトロのことです。おそらくペトロは会堂での主イエスの説教を聞き、自分の家に主イエスを招いたのでしょう。日曜日の礼拝が終わった後、わたしたちのふだんの生活、それぞれの自分の歩みを始めます。その普段の生活、日常の生活にシモンは主イエスを招いた、ということです。

ここには、とても大事なことが書かれている、と思わされます。礼拝が終わる、自分の生活に戻る。もし、日常の生活の間は主イエスのことは忘れていて、また日曜日になったら、聖書を開き、主イエスのことを思う、ということがわたしたちの歩みなのだとなれば、信仰は日曜日だけのこと。ということになってしまいます。しかし実際には、多くの場合信仰をそんなに単純に切り分けているわけではありません。ここで示されているのは、日常の生活の中に、わたしたち一人一人がキリストをお迎えする、ということ。会堂で聞いた説教、神の言葉を、日常の生活の中に迎え入れる。自分の生活の中に主イエスを迎え入れる、そのことがここで示されています。

ところで、シモンの家ではシモンの姑、妻の母が高い熱に苦しんでいました。急な高熱で、シモンが会堂に行って、主イエスを招いている間の出来事だったのだから、ここしばらく高い熱で苦しんでいたのか、それはよくわかりません。しかし、ここで大事なことは、家族に病人がいるから、家族にいろいろ事情があるから、主イエスを招

くことをやめてしまった、というのではなく、そのぼたぼたの中に、主を招かれた。自分の日常の生活の中に主イエスをお招きする、とはこういうことも含まれてのことです。それぞれの家にはそれぞれの家の事情があり、いろいろなことが起こる。すべて万全、掃除も隅々までできていて、食事の準備も完璧、というわけにはいかない。少なくともそういう時ばかりではない。主を招くとは、そういう中であっても、その中に迎え入れるということなのでしょう。同行した人々は、彼女のことをイエスに頼んだ。

「イエスが枕元に立って、熱を吐りつけると、熱は去り、彼女はすぐに起き上がって一同をもてなした。」主イエスはシモンの姑に対して、会堂で悪霊に取りつかれた男から悪霊を追い出したように、ここで癒しの奇跡を行いました。悪霊に取りつかれた人も、高熱に苦しむ姑も、人間を苦しめる力に抑え込まれていた。吐りつける、という表現からは、主イエスが人間を苦しめる力に対して持っていた憤りのようなものが感じられます。主が吐りつけると、彼女はすぐに起き上がり、一同をもてなした、ということです。主は癒しの奇跡をなさったのです。

ここで語られていることは、わたしたちと無関係な荒唐無稽な奇跡の話なのではありません。あらためて、この日のことを振り返ると、主イエスはカファルナウムの会堂で神の言葉を語られた。説教された。そして主イエスは悪霊を追い出すという癒しの業を、奇跡を起こされた。シモンは会堂での説教を聞き、礼拝だけでなく、自分の生活の中に主イエスを迎え入れ、日常の生活の中で、主イエスの言葉をもう一度受け取ろうとした。そしてそこで会堂で主がなさった悪霊に取りつかれたものの癒しということと同じ癒しの業を、自分の家で、自分の生活の場所で経験させていただいたのです。

わたしたちも礼拝で御言葉に聞く、説教に聞く。そしてそれを自分の生活の中で、ごくごく日常の、雑多で、あれやこれやに追われている生活の中で、主イエスを迎えて、御声に聞くのです。もちろん、主のみ言葉から離れてしまうことも、忘れてしまうことも、迎え入れるというにはほど遠い生活もしていることもあるでしょう。しかしそれでも、礼拝においてみ言葉に聞き、それを自分の日常で聞こうとする。そこで、主のなさるわざを経験していくことになる、ルカはそのことをわたしたちに伝えているのです。確かにわたしたちは今ここで記されているような悪霊の追い出しとか、高熱の癒し、ということそのまま経験するわけではないかもしれませんが。しかし大事なことは、自分の日常の中で御言葉に聞く中で、主イエスの働きにわたしたちがであっていき、ということなのです。

教会の週日に行われる祈祷会、これはほとんどの教会で行われている、聖書に聞く会です。日本の教会のととてもよい伝統だと思います。週の半ば、礼拝と礼拝の間に、聖書に聞く、じっくりと聞く。一つ聖書箇所、ヨハネ福音書であれば、ヨハネ福音書に集中して、聞き続ける。そしてその御言葉を自分の生活に持ち帰って、それぞれの場で聞く。それは本当に大事なことです。その中でわたしたちは主イエスの働き、それは根本、わたしたちを十字架において担い、救ってくださるという働きを感じ、受け取っていくのです。シモンはそのことを経験していったのです。

日が暮れて、安息日が終わると、いろいろな病気で苦しむものを抱えている人が皆、病人たちをイエスのもとに連れてきました。人々はイエスのことを知り、ぜひ癒してほしいと、イエスのもとに病人を連れて押し寄せました。主イエスはその一人一人に手を置いていやされました。

主イエスは、苦しみの中にある者の一人一人と出会って下さる。あなたには、あなたとして出会い、わたしには、わたしとして出会い、一人一人に手を置いて、一人一人を主の御業によって解放し、十字架の救いの中においてくださる。一人一人に出会って下さる主に、わたしも出会うよう招かれている。わたしに向かって語られている御言葉に出会い、わたしと出会う主イエスの呼び声に聞く。それがわたしたちの信仰生活です。

やがて朝を迎えました。多くの人々と出会い、いやされた主は、人里離れた所へ出て行かれました。人々は、群衆と呼ぶほどの群れになり、イエスを捜し回り、見つけると、自分たちから離れていかないようにと、懸命に引き留めるのです。おそらく、群衆は、主イエスの癒しの業を見て、ずっとここにいて、癒しの業を続けてほしい、と願ったのでしょう。

そのとき主は、人々に対して、こう言われました。「ほかの町にも神の国の福音を告げ知らせなければならない。わたしはそのために遣わされたのだ。」

主イエスはナザレでもカファルナウムでも、まず神の言葉を宣教する。説教する。そして力ある業をなす。奇跡行為をなす。この二つは深く繋がっている。主の癒しの奇跡は、根本神の言葉の力、神の言葉によって引き起こされていく奇跡なのだということです。主イエスの奇跡行為は、祈禱師や呪術師のように、祈祷や呪いで、悪霊を追い出したのではない。

主はナザレで、神はわたしを遣わされた。「捕らわれている人に解放を与えるた

め」と語りました。解放の福音です。その言葉は、イエス・キリストにおいて生きて働くのです。事実となる。さまざまなものにとらわれている人が、やがて主イエスの十字架と復活において解放されていく。それはわたしたち人間が、さまざまな力にとらわれていても、そこから解放つ神の支配の中にある、ということです。

主イエスが、わたしの使命は、神の国の福音を告げ知らせることだと言われた、その神の国の福音とは、あなたの神さまの支配の中にあるんだ、主イエスがこの地上に来てくださったことで、神の救いが実現していくのだ、という喜びのおとずれです。主の使命は、その福音の告知にある、そしてそれを人々が、聞いて、日々の歩みの中で聞いて、主の御業を経験していく、そのために遣わされているのだ、と宣教の始めに語られたのです。

D a t a : 聖霊降臨節第12主日礼拝式説教

讃美 : 前277、後405

新生教会礼拝堂